

中国・陝北における「エスノグラファーとしての芸術家」

「剪纸」をめぐる、芸術家と「フィールドの人々」の「流用」プロセスの考察

丹羽朋子(東京大学大学院 総合文化研究科)

【研究の視座】美術史家H.フォスターは論稿『The Artist as Ethnographer?』の中で、1980年代以降の現代美術界における「民族誌的転回」、即ち人類学的な諸主題への接近に加え、「フィールドワーク」を中心とした民族誌的手法そのものを取り込んだ芸術実践の興隆を論じた [Foster 1995]。人間感性への興味や視聴覚媒体を用いた手法の導入等を通じて、人類学者と現代美術家の活動は近年ますます接近しつつあり、協働的事例の報告も多い。また、そこには多様な文化に跨る芸術的ルーツを有する作家も多く参与する状況がある [Schneider and Wright 2006]。だがこのような報告の多くが(結果としての)「作品」の解説や芸術家側の言説に依り、諸実践をはじめから現代美術、「芸術」として論じている点は再考の余地があるだろう。芸術/人類学、西洋/非西洋の境が揺らいで久しい今日、この種の芸術実践を扱う人類学は、芸術家の「フィールド」経験にこそ目を向ける必要があると考える。

このような問題意識を出発点として、本発表は「フィールドワーカー」としての芸術家と、その実践に巻き込まれていく「フィールドの人々」との相互交渉に焦点をあて、具体的な事例分析を行う。ここでは、芸術家は個別の歴史文化背景を背負いつつ、旅人としてある土地に入り一時的に「住まう」なかで、芸術家としての身体や感性をもって土地の人々と交流していく。その過程で相互的な「流用」関係を結びながらそれぞれにとっての「芸術」(或いは別のもの)が「創作」される様子を考察していきたい。振り返ればM.ディーレンやS.フェルドをはじめ、芸術実践者でもあった「民族誌家」は多い。そもそも、参与を重視する人類学的調査自体が、自らの身体のある場所に投げ入れ、ある種の没入を通して自らと他者を重ね合わせていく経験だと言える。その意味で、フィールドで芸術家の実践が生成するプロセスに着目した本発表の試みは、上述の「民族誌的転回」に新たな論点を投げかけるのみならず、人類学の民族誌的实践との差異と親和性を考える上でも意義ある鏡像を提供し得ると考える。

【発表の概要】中国・陝北地域(陝西省北部)は、共産党軍による革命の拠点となった延安を中心とし、今も多くの人が黄土高原の山肌に横穴を穿った住居、窑洞に暮らす。当地の「剪纸」(切り紙)は、吉祥文様をはじめとする多様な形を鋏で切り出したもの(或いはその技術)を指し、農村の女性を主たる担い手とする。各種儀礼や室内外の装飾、或いは刺繍等の型紙として、窑洞暮らしには剪纸が欠かせない。また、80年代より国の後押しで技術の保存・開発が目指されて「剪纸学習班」が断続的に実施された結果、地域を代表する「民間芸術」となった。現在では専業、農業等との兼業「作家」が多数登場し、昨年には省級の無形文化遺産にも認定されている。2007年初に当該地にて始まった発表者の研究は、剪纸の作り手である農村女性と、剪纸の価値を見出して「民間芸術」化を促し、その経験を自らの芸術実践に取り入れる美術家たちに関する調査が絡み合う形で進んできた。

本発表では、後者の美術家に焦点を当て、現在進行中の彼らの活動への参与観察で得たデータを分析すると共に、それに先立つ美術家の実践に対する歴史人類学的なアプローチを試み、比較対照していく。具体的には以下の3つの時代の美術家たちが、陝北の大地を「フィールド」として、いかに剪纸と対峙し、現地の農民たちとインタラクションを繰り広げてきたかを論じる。

- (1) 新中国建国前後から文革期、農村生活を通じて剪纸を自身のプロパガンダ芸術へと流用した木版画家たち
 - (2) 文化大革命後に「民間芸術」復興の機運が高まった1980-90年代、地方政府の出先機関「文化館」を中心に農村調査と剪纸学習班の指導に取り組んだ都市と地元美術作家たち
 - (3) 近年、剪纸をめぐる行政と現地の人々を巻き込んで「フィールドワーク」を行い、その過程を各地の国際美術展で展示発表している、国内外の現代美術家によるアートプロジェクト・チーム
- (1)と(2)、(2)と(3)共に、前世代と後世代の間には師弟或いは影響関係があるが、それぞれの「フィールドワーカーとしての芸術家」のあり方には多様な連続と切断が見られる。特に、旅/住まうこと、多層的なルーツ探し、「芸術」や「創造性」の考え方、表現や展示の手段と形式等を検討事項とする。考察にあたっては、人類学者A.シュナイダーが民族誌的手法を取り入れた現代美術の諸実践を論じる際に提起した、「相互的な対話、理解の行為」としての「流用appropriation」 [Schneider 2006] という視角を参照する。同時にこの議論の欠陥を指摘しつつ、「もの」や環境との相互交渉への目配りが、芸術をめぐる人類学的研究に豊かな方向性を開きうることを提起する。